

富樫 剛編

『名譽革命とイギリス文学』

——新しい言説空間の誕生——

春風社 二〇一四・八刊

四六 四〇〇頁 三〇〇〇円

武田将明「あとがき」によれば、本書は二〇一二年五月に開催された日本英文学会大会でのシンポジウム「革命から政党へ」を契機に編まれた。大会準備委員の武田と西山徹、講師を務めた曾村充利・坂下史・富樫剛・中島渉、そしてシンポジウム後に協力を依頼された佐々木和貴が執筆陣に加わり、初期近代のイギリス文学あるいは歴史学を専門とする「不滅の七人」（二六八年六月三〇日にオレンジ公ウィリアムに宛てて招請状を發した七名）ならぬ七人の研究者が一人一章（序章を除く）を書き下ろして出来上がったものが、本書である。

序章「石炭あんか事件」（富樫）では、国王ジェイムズ二世の子（のちの老僭称者）の生誕をめぐる「たんなる嘘」が同時代的に有した影響力の大きさを例に、名譽革命前後に機能した「言説空間」の特徴が浮き彫りにされる。嘘から出たまことではないが、政治の仕事の一つは世の変動に際して「できるだけ多くの者が共有しうる物語」を想像ないし創造し普及させ、一種のフィクションを「事実として定着させる」ことにあると編者・富樫は言う。この言明は、坂下の第一章「名譽革命史と『言説空間』の位置」や武

田の第七章「名譽革命とフィクションの言説空間」とともに、往々にして保守的の革命と呼ばれがちなこの革命の性格をむしろイデオロギー対立が前景化した「近代的」（ピンカス）なそれに読み直しつつ、革命が決定的分裂を生まないまま歴史的画期として成立した理由を政治と文学の双方向のあるいは相互的作用を跡づけていく中で解き明かそうという、本書全体を貫く企図の存在を雄弁に物語る。

曾村の第二章「柔和なアングリカンと名譽革命」は保守アングリカンの中道思想が持つ包括性を強調した。包括とは対立する立場の中和であり、西山の第五章「マシュー・プライアー造反の理」が説くように、それは各立場の「相対化」と換言できるだろう。富樫による第三章「革命がおきたらおしまいだ」は権威への従順を説いて武力征服を嫌悪したドライデンの嘆息を表題に掲げる。当初、勝てば官軍のごとくウィリアムの一挙手一投足に神意を見た革命の過渡的言説は、革命後にどう変わったか。

第四章「舞台の上の名譽革命」（佐々木）と第六章「日和見主義の政治言説とそのレトリックを探る」（中島）の叙述の鍵となるのは「古来の国制」論である。この理論は民権派の急進的武器としても国王と貴族と庶民の均衡を保守する防具としても用いられたが、現実はずねに理論自体を超える。ロックの社会契約論とて例外ではない。したがって、一筋縄ではいかなかった現実の革命の具体的過程に「遡及的」（佐々木）ないし「事後的」（武田）な理由づけを施し、時間差を介して神意Ⅱ偶然と民意Ⅱ必然を総合する正統な歴史物語を創作する必要が生じた。この創作に成功して革命の過

渡的言説に終止符を打った人物が「イギリス小説の父」デフォードであったとされる。

最後に、叙述がイングランド中心に留まる点を本書の課題として挙げておきたい。本書にもたびたび登場する思想史学の泰斗ポーコックはイングランドにおける近代を「保守的」と呼ぶ。その含意は広く他地域に目配りすることなくみ取るしかない。

(林 直樹)